



Chris LOUITTIT,

*Dickens's Secular Gospel: Work, Gender, and Personality*

(168 頁, Routledge, 2009 年 4 月)

ISBN: 9780415991360

(評) 田村真奈美

Manami TAMURA

ヴィクトリア朝社会において「労働の福音 (gospel of work)」を盛んに説いたのはトマス・カーライルであるが、一般に労働を聖なるものとみなす考え方は宗派を超えて、特にミドル・クラスを中心に普及していた。自助の人 (self-made man) デイケンズも当然この考え方に連なると考えられている。またデイケンズ作品では、職業が人物像を決定する、という例も多い。弁護士や役人然り、職人、役者、果ては洗濯女然りで、この傾向はとくに脇役クラスの人物に見られ、デイケンズの人物描写は紋切り型で一面的であるという批判を招く一因ともなっている。

クリス・ルティート (Chris Louttit) は本書において、上記の2つの見方の修正を試みている。ルティートによれば、確かにデイケンズの作品においても労働を尊ぶ精神が支配的ではあるが、特に後期の作品になると労働は善、怠惰は悪という単純な二項対立では解釈しきれない。また、職業が人物像を決定するというのもある程度は当てはまるが、それはデイケンズの関心が仕事の「人間的な」面、つまり種々の仕事がそれに携わる人の人生にどう影響を与えるか、にあるからだという。(タイトルにある「デイケンズの世俗の福音」とは、カーライルの説く「労働の福音」が仕事全体を抽象的に捉えるピューリタンの宗教色の強いものであるのに対し、デイケンズの場合は個人の生活における仕事を描いていて「世俗的」であるところから来ている。)そして、『ピクウィック』から『エドウィン・ドルード』に至る作品の精読を通じて、このことを論証していくのである。

デイケンズ作品における 'work' と一口に言っても、それは肉体労働であったり、専門職であったりする。金銭的報酬を伴わない仕事もある。また、働く人がいれば働かない人もいるわけで、働かない人々の描写もまた、逆説的にデイケンズの職業観を浮かび上がらせる。本書ではこのような仕事の多面性に留意し、それぞれを別々の章で扱うことで、デイケンズの職業観が一様ではないことを明らかにしていく。また、これを裏付ける資料としてルティートはディケ

ンズの書簡や伝記に言及するが、さらに広く同時代の職業意識のなかにおいて捉えるために、さまざまな歴史資料も駆使している。そこにはカーライル、ラスキンなどの「定番」から、ディケンズが訪れたアメリカの工場のパンフレット、専門職に子どもを就かせたい親のためのガイド本、過剰な頭脳労働が人間の精神に与える影響を訴えた当時の医学資料なども含まれており、ディケンズの作品がこれらから受けた影響も窺い知れて興味深い。

本書で取り上げられるのは長編小説に限らないが、言及される作品にはやや偏りがある。例えば『ハード・タイムズ』については、一箇所短い言及があるのみである。また、テーマごとの章立てであるため、年代順に作品が取り上げられているわけではないが、それでも第1章の初めでは初期の作品、最終章の後半では『二都物語』、『互いの友』が取り上げられ、さらにそのままエピローグの『エドウィン・ドルードの謎』の考察へとつながっており、ある程度年代順の枠組みは意識されている。それは、ディケンズの職業観が時の経過とともに変化することも示そうとしているからである。

第1章では、ディケンズの作品においては本当に仕事が人物像を決定づけているのかどうか、初期の作品から後期の作品へと「脇役」の人物を取り上げて考察している。初期の作品は、「内面は外面に現れる」というヴィクトリア朝初期の文化においては一般的であった考え方（骨相学の流行もその一例）に強く影響されており、また、人々をタイプに従って分類して描写するのは他の作家や画家にも共通する手法であったことが述べられる。しかし、後期の作品では外見が中身を裏切るケースが見られ（キャプテン・カトル、ジョージ・ラウンズウェル、ジョー・ガージャリなど）、その背景には、心理小説やセンセーション・ノベルの流行にも見られるように、社会に「秘密に魅せられる」傾向があったと説明される。

第2章は肉体労働とジェンダーの問題が取り上げている。ディケンズの作品には働く娘たちが数多く登場するが、ディケンズは基本的に肉体労働は男性のものであり、女性が肉体労働に携わると「女らしさ」が失われる、という意見だった。肉体労働を「男らしさ (manliness)」と結びつけて讃美する風潮もまた当時はポピュラーなもので、これをテーマにした絵画も多く描かれており、ここでもディケンズは社会において支配的な見方に同調している。しかし、後期の小説『互いの友』では、ワーキング・クラスヒロイン、リジー・ヘクサムや人形作り職人のジェニー・レンが「女らしい」とされ、とくに体力的に過酷なリジーの仕事については「男性性」を強調しないように作者が（かなりごちないが）工夫している様が見られると指摘し、ここに因襲的な肉体労働のジェンダー化からの逸脱が見られるという。この結論については「逸脱」の例

が少なくやや強引な印象を受けたが、この章で興味深かったのは、家の中で静かに座って執筆する作家の職業をディケンズが「女性的」なのではないかと不安に感じていたというくだり（45頁）である。そのために執筆作業を鍛冶屋の仕事（男らしい肉体労働！）に例えたこともあったというが、当時著述業に携わる女性が増えていたことも一因なのだろうか。

第3章はディケンズ作品における専門職（profession）の扱いがテーマである。もともとディケンズは「伝統的な」専門職一般に不信を抱いており、そのために初期作品に描かれる専門職の男性は非人間的であることが多い。その一方で彼は、技術者のような「新しい」専門職には期待を抱いていた。19世紀半ばはちょうど専門職とみなされる領域が拡大しつつある時期で、ルティートはディケンズの小説にもその過程が読み取れると主張する。また、この章では専門職に就くための教育についても論じられている。ディケンズは、パブリック・スクールで行われていた古典中心の教育よりも「役に立つ」教育を好み、長男をパブリック・スクールに入れたのは間違いだったと考えていたという。また、息子の就職についてのディケンズ自身の心配が後期作品の若者たちに反映されているというフィリップ・コリンズの説を支持し、『デイヴィッド・コパフィールド』以降の長編小説の若い男性登場人物たちを取り上げて検証している。教養教育か実践教育かの論争や就職の悩みなどは現代でも非常に身近な問題であり、ディケンズが一段と身近に感じられた。

第4章で取り上げられる仕事は家庭内の仕事、家政である。ここでは前章から一転して女子教育が問題となる。『デイヴィッド・コパフィールド』のドーラが家政一般に無知であったのは、彼女の受けた教育が「たしなみ（accomplishments）」中心の教育であって実践的ではなかったからであり、女子教育についてもディケンズは実用性を重視していたとする（ただし、自分の娘たちにはたしなみ型教育を受けさせたそうだが）。その一方で近年の研究、特に Monica Cohen の *Professional Domesticity in the Victorian Novel: Women, Work and Home* (1998) が主張する「家庭の専門職化（professionalization of home）」について、ディケンズはその犠牲者（例えばアグネス・ウィックフィールドやエスタ・サマソン）までも描いていると論じる。そしてこれはディケンズが、公共の領域でも家庭という私的な領域でも仕事が個人のアイデンティティを支配することへの懸念を抱いていたからだと指摘する。

こうして仕事の否定的な影響がディケンズ作品には意外なほど描かれていることが明らかにされてきて、続く最終章（第5章）で考察されるのは「無職」である。基本的にディケンズは「無為」、「怠惰」に対して批判的で、それはカーライルの姿勢にも通じるが、一方で「無為」を贅沢なものとして憧れている

ふしもあるという。『バーナビー・ラッジ』では「仕事」が驚くほど否定的に描かれているという指摘や、『骨董屋』は最も怠惰なディケンズ作品（まともに働いている人物がほとんどいない）という指摘も興味深い。さらに、『二都物語』や『互いの友』は、ディケンズが「怠け者 (idler)」をヒーローにしようとした作品であると論じられる。シドニー・カートンやユーージン・レイバーンは表向きは怠け者だが別の面も持ち、心理的には複雑で謎に満ちた人物である。彼らの人物描写が完全に説得力を持っているかどうかは疑問が残るが、少なくともディケンズが「怠惰の重層性」に興味を持ち、好意的にすら見ていたということは確実である、とルティートは主張する。

そしてエピローグでは、怠惰の重層性から、ディケンズ作品における仕事とアイデンティティの戯れの関係へと議論は進む。後期作品の怠け者たちは偽りや隠された秘密を明らかにすることに熱中するが、実際作中の人物とその仕事の関係も単純なものではなくなり、外見が中身を裏切るようになっている。つまり、ディケンズは、カーライルの「労働の福音」とは一線を画すように、登場人物の生に刻み込まれた仕事を、ときに懐疑的に、また戯れの精神をもって描いた、と結論づけられる。

しかしながら、第5章の冒頭に、ディケンズが『荒涼館』において働かない貴族階級を行動・変化に対する抵抗とみなして攻撃している、とあることが評者には気になる。ディケンズの怠け者のヒーローはどちらもミドル・クラスである。ミドル・クラス男性の「無為」、「怠惰」には一種の魅力を見出したのかもしれないディケンズも、それが貴族や労働者階級の怠惰であつたらどうなのだろう。第2章で扱われた肉体労働や第3章の専門職の場合は、職業自体がそれに就く人の階級をある程度規定するが、「怠惰」はどの階級にも見られることである。また、第4章まではジェンダーの問題が意識されているのに、第5章では当然であるかのように男性の「怠惰」しか扱われない。階級や性別によってディケンズの「怠惰」に対する反応は違ったのではないかと予測されることもあり、ここはぜひ階級やジェンダーの問題も絡めて論じてほしかった。

奥付を見ると著者は30代初めであり、この本は博士論文を発展させたものであろうか。全168頁とコンパクトなためか多少物足りなさは感じたものの、全体の議論のつながりはわかりやすく、結論も妥当なところに落ち着いている。何よりも、ディケンズの数多ある作品を丁寧に読んでいることに好感が持てる。また、引用される伝記や書簡、歴史的資料のバランスもよく、全体に生真面目な印象で、特にこれから博士論文を書こうという若手研究者には参考になるのではないだろうか。